小学校編

学びの連続性を図るための指導の在り方
ー幼児期の育ちや学びを生かした教科横断的な指導の実践ー

勝浦市立勝浦小学校教諭　吉野（よしの）　里美（さとみ）

1　研究主題について

近年、幼児期の教育と小学校教育の連続性・一貫性の重要性が高まっている。幼児期の教育で育まれた資質・能力を踏まえた指導を工夫をすることで、児童が主体的に学びに向かうことが可能となるようにすることが求められているのである。

そこで本研究では【視点１】幼児期の育ちや学びを生かした教科の学習、【視点２】生活科と他教科を関連させた教科横断的な指導、の２点に焦点化し、幼児期の教育から小学校教育への学びの連続性を図るための指導の在り方を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

2　研究の実際

第１学年「おみせやさんごっこをしよう」
（国語 10 時間　生活５時間　計 15 時間）
【関連単元】「ことばって、おもしろいなーものの名まえー」（国語科）、「いっしょにあそぼうーがっこうへようこそー」（生活科）

⑴【視点１】について

保護者への聞き取りや幼児教育施設での幼児の活動・教師の姿を参観し、本単元で幼児期の学びを生かした授業となるよう、次の①～⑤の五つの取組を考えた。

①自分たちで作成した具体物を使って、体験活動（お店屋さんごっこ）を行った。これにより、「これください」「お花ください」と言っていた児童が「バラを１本ください」「カツオを買います」など、上位語と下位語を意識した会話ができるようになった。

②活動の中に「手遊び歌」を取り入れた。これにより、活動の中でうまく言葉を発することのできなかった児童が、リズムに合わせて言葉を出せるようになった。

③交流活動にストーリー性を持たせた。これにより、単元を通して、児童は意識が途切れずに活動することができた。

④製作や体験活動の時間を２時間続きで確保した。これにより、グループの仲間と話し合い、試行錯誤しながら主体的に活動する姿が多く見られるようになった。

⑤「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指導計画に明記した。これにより、幼児期の児童の経験や学びを意識して指導できるようになり、的確にアドバイスができた。

⑵【視点２】について

生活科における直接的・具体的な「人」「もの」との関わりを通した学びと、国語科における学び（言葉の上位語・下位語の関係に気付き、それを適切に使ってやりとりする）とを関連させて指導することで、生活科と国語科の学びがより確かなものとなるよう、次の①・②二つの取組を考えた。

①幼稚園年長児との交流を設定し、相手意識を持たせた。これにより、児童は国語科の上位語・下位語を意識してお店の看板を作成し、交流の当日は分かりやすくお店を紹介することができた。

②物の売り買いだけでなく、魚屋さんでは釣りをしたり、花屋さんでは折り紙で花を折ったりするなどの体験を取り入れた。これにより、「一緒に作ろうね」「順番に並んでね」などの言葉が聞かれるようになった。事後の振り返りでは、自身の成長に気付いている児童が多く見られた。

3　研究のまとめ

幼児期の経験や学びを教科の学習に取り入れたり、生活科と国語科を関連させ、具体的な活動や体験を通して学習したりしたことで、児童は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を発揮しながら、主体的に学びに向かい、生き生きと学習に取り組むことができた。また、教科の目標を達成することもできた。今後、更なる学びの連続性を図れるよう、互恵性のある年間計画の作成を考えていきたい。

小学校編

児童の選択･判断する力を育成する小学校歴史学習の構想
ー児童が葛藤しながら判断していく学習活動を意図的に設定した単元開発を通してー

流山市立小山小学校教諭
（前松戸市立六実小学校教諭）　佐藤（さとう）　祐介（ゆうすけ）

1　研究主題

今後、日本は、人・資本・情報・技術などが国境を越えて自由に移動し、多様な価値観が存在する「グローバル化」がますます進むと予想されている。そのような状況の中では、結論を出さなければならない価値葛藤問題（価値観によって判断が分かれる問題）が更に増えるであろう。こうした背景を踏まえ、児童に様々な価値について複数の立場や意見を踏まえて思考する力やそれを合理的に選択・判断する力を身に付けさせたいと考え、本主題を設定した。

2　研究の実際

社会的に判断が分かれるような価値葛藤問題を６年生の歴史学習に取り入れ、以下のような実践を行った。

⑴単元について

「明治の国づくりを進めた人々」（10 時間）を二つの小単元①「幕末の国家の在り方について判断する」、②「明治時代前半の国家の在り方について判断する」で構成した。①では「開国」について、②では「政府主導の政治」について「賛成」「反対」の立場を学び、討論を経て自分なりの判断ができるようにした。

⑵手立て

①資料の工夫

毎時間「幕末瓦版」「明治新聞」を資料として配付した。賛成・反対それぞれの立場の視点で考えるのに必要な情報を提示し、事実認識を確実にしてから思考できるようにした。

②ワークシートの工夫

ワークシート（**図１**）のマス目の中に「○」を付けさせ、自分の立場を明確にさせた。

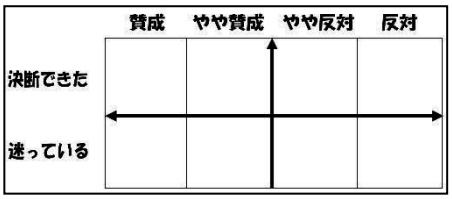


図１

③単元構成の工夫

「開国」「政府主導の政治」について、「賛成」「反対」の立場を１時間ごとに交互に学ぶよう単元を構成した。新しい事実や解釈に触れるたび、自身の選択・判断が揺らぐことを実感できるようにした。

3　児童の変容について考察とまとめ

⑴児童の変容

①授業の終わりに「賛成・やや賛成」を判断・選択した児童の数は、毎時間変化し、一定になることはなかった。

②「賛成・反対」の判断を「迷っている」に「○」を付けた児童について、単元のはじめと終わりで比較すると、小単元①では 21 人→５人、小単元②では 14 人→５人と減少した。

③単元のはじめは、日常的判断（具体的な根拠を示すことができないまま判断）をする児童が多かったが、後半には合理的判断（複数の視点から複数の問題解決方法を思考）をする児童の方が多くなった。

⑵考察とまとめ

これらの変容から、児童は、複数の立場や意見を踏まえて思考し、賛成・反対の判断について葛藤する中で、社会認識を高め、合理的に選択・判断する力を身に付けることができたと考える。

中学校編

探究学習が理科の学習意欲に及ぼす影響に関する実践研究
―中学校第１学年「物質のすがた」を事例として―

大網白里市立大網中学校教諭　篠原（しのはら）　孝司（こうじ）

１　研究主題

OECD が進める国際的な学習到達度に関する調査（PISA）において、日本は、学習意欲が低い子供たちが多いことが分かっている。そこで、生徒が主体的に実験計画を行う探究学習を取り入れることによって、生徒の「好奇心」や「挑戦行動」を刺激し、学習意欲の向上に有効であるかを検証したいと考え、本主題を設定した。

２　研究の実際

⑴研究方法

１学年３クラスのうち、２クラスを「実験群」（主体的に実験計画を行う探究学習を取り入れた授業を実施）、残り１クラスを「統制群」（従来どおりの教師が指示した実験方法を行う授業）とし、全て同一授業者が指導した。また、実験群と統制群の双方に事前・事後アンケートを実施した。更に、毎時間、授業の終末に感想を記述させた。

⑵検証授業の実施

中学校第１学年「物質のすがた」の単元における探究学習を取り入れた単元計画（全 11 時間）を作成した。そのうちの１時間「発生する気体は何だろうか」を紹介する。

①実験群

ア　教師が問いを提起する

４種類の実験方法（a 風呂釜洗浄+お湯、b ベーキングパウダー+酢、c 炭酸水素ナトリウム＋クエン酸、d 漂白剤+お湯）の中から、実験を一つ生徒たちに選択させた。

イ　生徒が探究の計画を立案する

生徒たちは自分で実験方法を考え、実験を行った。前時に学習した実験方法を参考に、自分たちで実験を進めた。

ウ　生徒が結論付けを行う

実験方法と結果を自分たちでまとめたものを黒板に掲示させた。生徒たちは、他班の実験結果や考察を見て、自ら結論付けを行った。

②統制群

「問いの提起」から「結論付け」まで教師が主導して授業を進めた。

統制群と比較して実験群のクラスの生徒は、実験する際、統制群よりも楽しみながら授業を受けている様子が見られた。また、授業の感想では「教師の指示ではなく、自分たちで考え、実験することが楽しい」や「自分たちで考えてやるのは難しかったが、また自分たちで考えてやってみたい」や「自由研究並みに楽しかった」などの肯定的な意見が統制群よりも多く見られた。

⑶検証結果と考察

単元の前後に行ったアンケート調査から、実験群の生徒は、統制群の生徒と比べて、観察や実験に対して「挑戦したいという意欲」が向上していることが分かった。

また、生徒が毎時間、授業の週末に記述した感想を、テキストマイニング（通常の文章からなるデータを単語や文節で区切り、それらの出現頻度や相関などを解析する分析方法）を用いて分析した。動詞における出現頻度を比較してみると、統制群では「分かる」「知る」が多いのに対し、実験群では「できる」「考える」「調べる」などの単語が多かった。実験験群の生徒は、統制群の生徒と比べて、より主体的に学びに関わっていたものと考えられる。

３　研究のまとめ（成果と課題）

本実践では、学習意欲の中でも「挑戦したいという意欲」を高めることはできたが、「自分の力で解決できたという有能感」を高めるには至らなかった。これは、いくつかの学習課題が生徒にとって難しすぎたためだと考える。今後、探究学習で課題を設定する際は、生徒が「挑戦」したいと思える難しさであると同時に、自分たちだけの力で解決できるレベルの課題を設定することも重要であると考える。

中学校編

創造的に音楽と関わり表現する楽しさを実感できる音楽科指導の在り方
―対話的な学びを取り入れた創作活動を通して―

野田市立第二中学校教諭　片岡（かたおか）　憂佳（ゆか）

１　研究主題

これまで私の授業実践では、イメージと関わらせて表現したり、音の重ね方や音楽の構成、組み合わせ方を創意工夫したりする活動には至らなかった。そこで本研究では、以下の視点において手立てを講じれば、生徒がより創造的に音楽と関わり、表現する楽しさを味わえるだろうと考え、本主題を設定した。

【視点１】鑑賞教材と関連させた創作活動の往還

【視点２】思考ツールの活用から表現につなげる学習過程の設定

【視点３】音楽科における対話的な学びの設定

２　研究の実際

先に述べた視点１から３の手立てを各学年の実態に合わせて系統的に計画した。山田俊之作曲「祝いの手打ち」を扱い、鑑賞と表現を往還させて思考を深め、一人一人が対話的に音楽と楽しく関わっていくことを目指した。

⑴１学年：音素材とリズムの習得（全２時間）

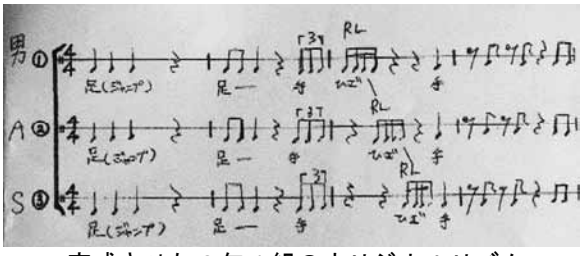
生徒がリズムを習得し、自信をもって演奏することができることを目標に、「ボディーパーカッション」の様々な音色を鑑賞し、グループで対話しながら、リズムと言葉を関連させ、リズムを習得させた。【視点１・３】

「言葉に当てはめたらリズムをとれるようになった」という活動後の生徒の発言から、言葉とリズムを関連させることがリズム習得に有効であることが分かった。

⑵２学年：イメージから創作活動（全６時間）

「クラッピングミュージック」「ケチャ」を鑑賞し、基本のリズムをグループで実際に表現した。その後、表現を往還させ、音を探す、即興で試す、ルールを共有する、つくる、体験する、聴き合う、批評し合う等の活動を通してリズム創作に挑戦した。【視点１・３】

創作の際にウェビングマップ等の思考ツールを使って音楽の構成を思考し、班で対話を深める場を設定した。班でつくったリズムをつなぎ合わせて、クラスのオリジナルリズムとしてまとめ、全員で演奏することができた。【視点１・２】



完成させた２年１組のオリジナルリズム

⑶３学年：思考から表現へ・より良い表現の追究（全２時間）

「祝いの手打ち」を更に進化させる表現を目指した。「ロックトラップ」の演奏を鑑賞し、新たに学んだ音色を試し、表現の工夫を考え、創作を行った。生徒はどのようなリズムや音色を使えば、印象的で愛着のある作品になるかまで試行して表現を完成させ、発表することができた。【視点１・３】

３　研究のまとめ（成果と課題）

本研究を通じて以下３点の成果があった。

⑴鑑賞と創作活動を往還させることで、より良い表現を求めようとする意識を高めることができた。⑵思考ツールの活用により、イメージを広げ、思いや意図を音楽につなげて創作することができた。⑶音や音楽を伴う対話的な学びを学習過程に取り入れることにより、互いに意見を共有し、自分たちの表現に取り入れて創作することができた。

今後、創作のアイデアやヒントにつながるための鑑賞教材をさらに研究していくことが課題である。更なる努力を続けていきたい。